

年間第二十主日

2016.8.14

ルカ 12・49-53

今日の福音のみことばは、エルサレムへの旅の途中でイエスが洩らされた嘆息のように響いています。今日の「聖書と典礼」には、「そのとき、イエスは弟子たちに言われた。」という出だしのことばが付けられていますが、聖書を開いて今日の福音の箇所を見ると、そのような断り書きはありません。今日の福音にはイエスのみことばだけが響いていて、それを聴いた弟子たちや周りの人々がどのように思ったか、その反応は語られていません。

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることか」。

「わたしには受けなければならない洗礼がある。それが終わるまで、私はどんなに苦しむことだろう」。

「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらしすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ」。

イエスのこれらのみことばを聴いた時、イエスが何を言おうとしておられるのか、弟子たちには理解できなかったにちがいありません。だから、誰も、何も言えず、何も言わなかったのです。イエスにはそんな弟子たちのことが分かっていたはずですが、それでも、何の説明も加えずに、このようなことを語られたのは、彼らに何かを教えようとしてと言うよりも、そんな弟子たちに御自分の心のうちにある想いを、ただただ聴いて欲しかったからではないでしょうか。今日の福音には、そんなイエスの抑えがたい想いが吐露されているように思えます。

そのようなイエスのみことばが福音書に書き記されたのは、イエスの後についてエルサレムに向かっていたあの時、弟子たちには理解できなかったこれらのみことばが、分からないまでも、弟子たちの心に深く刻みこまれたからにちがいありません。弟子たちの心にそれほどの印象を与える切実さをもって、イエスはこれらのみことばを口にされたのです。

イエスの復活の後に、イエスの復活によって聖霊を注がれた弟子たちの心の中に、それまで謎であったこれらのみことばは復活されたイエスとともに蘇ってきたのです。

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることか」。

使徒言行録に語られている聖霊降臨の恵みを体験した弟子たちは、エルサレムへの旅の途中でイエスの口から漏れたあのみことばが何を意味していたかを悟ったのです。自分たちの上に降った同じ聖霊の火が、あのかのときのイエスの胸のうちに熱く燃えだぎっていたことを理解したのです。自分たちに注がれた聖霊によって、イエスのうちに漲っていたあのかの熱い想いを知ることが出来たとき、弟子たちは、イエスがあのかの時、御自分の十字架の死について語られたことばの意味をも悟ることが出来たのです。

「わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、私はどんなに苦しむだろう」。

イエスの十字架の死は、その墓の彼方に開かれる復活のいのちをこの地上にもたらすためにイエスが父なる神の御手から受けられた洗礼であったのです。あのかのとき、受けなければならぬ洗礼と言われたのは、十字架の受難のことだったので。そしてそれは、イエスのいのちを熱く焦がし、聖霊降臨によって弟子たちの中に燃え広がった、いのちそのものである神の愛の炎がこの地上に燃え広がって行くためだったので。復活されたイエスのいのちそのものである聖霊に満たされた弟子たちは、復活の主であるイエスによって遣わされた宣教の日々の中で、エルサレムへの旅の途中でイエスが語られた今日の福音のみことばが自分たちを奮い立たせてくれることを実感していたことでしょう。こうして、洗礼者ヨハネが告げていた、聖霊と火による洗礼が十字架の死を越えて復活されたイエス・キリストによって、弟子たちの教会に託されたのです。

「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておおくが、むしろ分裂だ」。

イエスのこのみことばは、イエスに遣わされた宣教活動の日々の中で、弟子たちにとって自分たちと自分たちが宣伝する復活の主イエス・キリストを結ぶ慰めのみことばとなったことでしょう。聖霊に満たされて語っても、弟子たちが宣伝する宣教のことばがすべての人によって受け入れられるわけではないことを弟子たちは経験するからです。けれども、弟子たちのそのような経験が弟子たちを落胆させることはありません。むしろ、弟子たちのそのような経験はますます彼らを奮い立たせたのです。イエスがあのかのとき洩らされたみことばの意味を、弟子たちはその困難な宣教活動の中で、自分たち自身の経験を通して悟ることが出来たにちがいないからです。

そのようにして弟子たちが悟ることの出来た今日の福音のイエスの最後のみことばは、振り返って思い起こしてみると、旧約のミカ預言者が告げていたことであつたと弟子たちには分かつたはずで。す。

「父は子と、子は父と、母は娘と、娘は母と、姑は嫁と嫁は姑と対立してわかる」。聖霊の光に照らされて弟子たちが理解することの出来た、イエスがあ

のとき口にされたこの預言者のことばは、旧約聖書のミカ書 7 章に記されていることばです。イエスが口にされたミカ書 7 章は次のようなことばで始まっています。

「悲しいかな。わたしは夏の果物を集める者のように、ぶどうの残りを摘む者のようになった。もはや、食べられるぶどうの実はなく、わたしの好む初なりのいちじくもない。主のいつくしみに生きる者はこの国から滅び、人々の中に正しい者はいなくなった」。(ミカ 7・1-2) 預言者は神の口となって、神のみこころを示すこのような嘆きの歌を歌っているのです。イエスがあのとき口にされたのは、預言者を通して歌われた神の嘆きの歌の終わりの一節です。しかし、預言者はこのような嘆きの歌を歌った後で、決然と宣言するのです。

「しかし、わたしは主を仰ぎ、わが救いの神を待つ。わが神は、わたしの願いを聴かれる。わたしの敵よ、わたしのことで喜ぶな。たとえ倒れても、わたしは起き上がる。たとえ闇の中に座っていても、主こそわが光」。(ミカ 7・7-8)

復活されたイエスによってもたらされた聖霊の賜物を受けて、弟子たちはこの預言のことばがイエスの十字架の死と復活によって実現されていることを悟ったのです。旧約のあの預言者のことばは、自分たちが経験したイエス・キリストの十字架の死と復活によってもたらされた神の終末における決定的な救いを告げる神のみことばであったことを弟子たちは悟ったのです。

イエス・キリストの十字架の死と復活において実現した神のこの世界に対する終末の決定的な救いの福音を告げ知らせるために、自分たちは復活の主イエス・キリストによってこの世界に遣わされているのだ。これが聖霊降臨の恵みを受けて、聖霊に満たされた弟子たちの、聖霊降臨の日から始まった宣教活動を支え続けている、そして、今もわたしたちの教会に受け継がれている、イエスの死と復活を告げ知らせる、復活の主イエス・キリストによって託されたわたしたちの教会の使命なのです。

今日もわたしたちはここに集って、わたしたちの主イエス・キリストの死と復活を告げ知らせるこのミサをささげています。ここに集うわたしたち一人ひとりが、このミサに示されているわたしたちの主イエス・キリストが十字架の死によってもたらしてくださった神の救いを信じる恵みを願って、その信仰の恵みの炎が一人でも多くの人々の心に燃え広がって行くことを祈って、感謝のうちにこのミサをおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高